

あいだのすみっこ不定期漫遊連載 第95回

観光案内に載らないパリ案内 (中)

日曜日と月曜日、たった2日で廻れる、知られざる街中の秘境

稲賀 繁美

(いなが しげみ/国際日本文化研究センター、総合研究大学院大学)

パリの『千夜一夜』

近年では、フランスの宗教人口は、イスラムがカトリックを上回ろうという趨勢となっている。アラブ世界研究所*図9は、シテ島のノートルダム大聖堂の東端から南へ枢機卿橋*図8を渡った先のサン・ジェルマン大通りをひたすら東へと進むと、やがて出現する。壁面全体にアラベスクを模した、光度対応自動開閉シャッター式金属窓が貼りめぐらされた、ジャン・ヌーヴェルの「傑作」だから、すぐそれと見分けがつく。両方を壁にはさまれた細長い昇り傾斜の入り口を入ると、そこからは途端に、ああ、例のフランスの中東だな、となる。窓口の対応はきわめて丁寧なのだが、接客の作業効率がきわめて悪い、という意味。

春に訪れた際には、アラビアン・ナイト、『千夜一夜』の特別展が話題となっていた。音声ガイドを借りるのに10分ほどもかかったあと、ようやく展示室に入る。導線がさっぱり不明の展示で、初期のアラビア語手稿から、アントワヌ・ガランらによる最初の欧文訳、日本語に至るまでの書籍群が、暗闇のなかに浮かび上がる。英語、仏語の音声ガイドは、日本と違ってひとつひとつの説明が長くてくどい。おまけに展示作品との関連が、ままだ理解不可能。

上階にあがると、座って朗読をイヤフォンで聴くロトンドやら、ジョルジュ・メリエスの『千夜一夜の宮殿』(1905)をはじめとする歴史的な映画が上映される壁面など入り乱れ、映画狂のフランス人観衆はそこ

で釘付けになってしまうものだから、先に進めず、押し合いへしあいとなる。日本のように会場係の女性が「立ち止まらずに進んでください」と要請したりする仕組みではないのだ。ハリウッド映画のシンドバッドの冒険から、レオン・バクストとニジンスキーのバレエ・リュスによる『シエラザード』、さらには現代のベリー・ダンス満載のエジプト映画、アラジンのランプの特撮映画のクリップ、空飛ぶ絨毯や空飛ぶ御殿(ちなみに、ジョージ・ルーカスの『スター・ウォーズ』の意匠は、この「空飛ぶ御殿」や、後出のプティ・バレの動物彫刻からの借り物だな、と容易に



図8 パリ、ノートルダム大聖堂東 枢機卿橋 欄干は「愛の錠前」で溢れている(本誌196号本連載稿参照)。

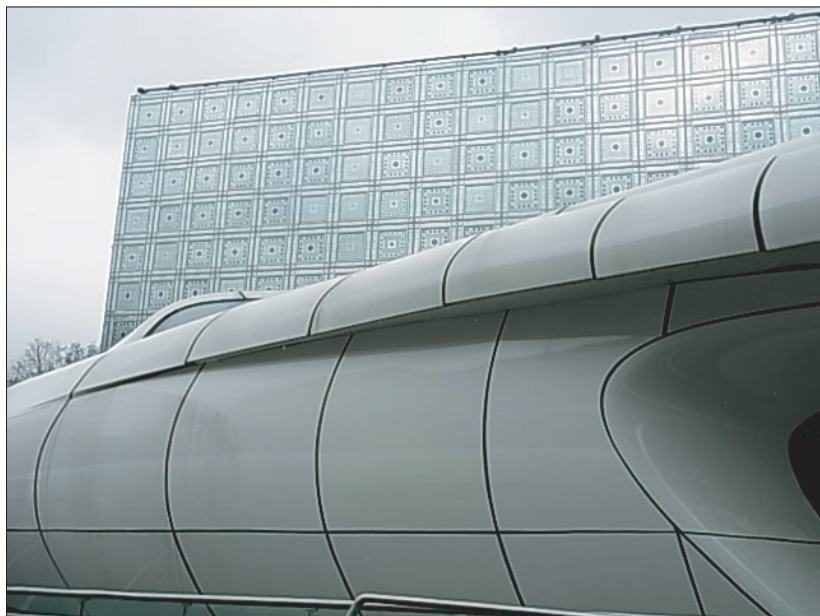


図9 ジャン・ヌーヴェル設計の「アラブ世界研究所」(パリ, 1987) 外観

察しがつく), 加えて, アリババと40人の盗賊の影絵など, 音声と音楽と映像とが交錯する「東洋的混沌」。

おりからのシリア内戦ゆえ, ジャック・ラング館長肝いりでシリア救済の講演会が別室で開催され, デモ隊が外で氣勢をあげて警官隊と睨み合い, 入り口では持ち物検査が強化されて長蛇の列が出来ていた。これも日本では経験できない, 臨場感溢れる政治状況だ。付言すれば, ここでも常設展示が刷新されていたが, 映像重視の近年の傾向が, 遺物展示とまだ充分には調和を得ていない。説明不足の現物展示か, さもなくば長時間足止めの視聴覚映像か。どちらにしても, 問合いが取りにくい。イスラームの発展とともに呪文のタリスマンが流行した様子, 天測儀アストロラーベの使用法の解説, 公衆浴場ハマームで使う, ハリネズミ型アカスリや, 女性用の豪華な下駄の音声実況, アラブ各地の楽器の音声付の演奏展示など, 番組一巡を辛抱強く待っていると, 時間はいくらあっても足りはしない。当地での人びとの情報入手のやり方は, 巡航速度もばらばらで, 日本式の列をなした

満員御礼, トコロテン式人間遊歩道式観覧慣習とは, 今日なお大きく異なる。とはいえ, 情報機器の近年の発達に, 展覧会方式の展示は, もはや決定的に時代遅れとなりつつある。

その反面, 地上階の書籍購買部は実に充実している。アラビア語, ペルシア語の印刷物が大量に出回っており, フランス語書籍は専門研究書も含め, 地中海古代史や考古学からイスラーム哲学, 地中海文化史, 植民地の歴史から現代の政治経済情勢の分析まで, さらにまた人類学, 民族学からアラブ音楽やイスラーム美術, アンダルシアの建築に至るまで, ほぼ全域を押さえている。ブランリー美術館のアフリカ, オセアニア関連図書購買部とあわせて, 非欧米文化に関する書籍や情報を一般公衆が入手するには, パリは依然としてフランス語圏の中心地たる地位を, いささかも失っていない。そのフランス語での書き手たちも, いまや多くがマグレブ圏やアラブ圏出身の知識人たちなのである。カルチエ・ラタンの大学付近の一般書籍小売店が軒並み不況を託っているのとは, それは好対照であった。

シャイヨー宮再訪

さらにもうひとつ、日本の観光案内から漏れている「穴場」を訪れておこう。エッフェル塔の対岸正面に位置するシャイヨー宮である。団体さんの観光客は、この宮殿のテラスにまず連れてこられ、セーヌ川ごしのエッフェル塔を背景に、「ハイ、ポーズ」とやって記念写真におさまるや、バスに乘せられて、足速に次の目的地へと移動してしまう。だが、第2次世界大戦直前の1937年、パリ万国博覧会で、「ドイツ第三帝国館」（アルベルト・シュペアー設計）とソヴィエト連邦館（ボリス・イオファン設計）とが対峙したこの空間の丘陵両翼に、1878年より今日に至るまで、仏蘭西の貴重な文化財の宝庫が位置している。

まずセーヌ川からみあげて左翼には、人類学博物館と海軍博物館が納まっている。ヴァンセンヌの森の旧植民地博物館は、ながらく地上はアフリカ・オセアニア美術館、地下は水族館だったが、地上部は改組されて移民博物館となり、作品の多くはプランリー河岸の新美術館へと移動した。これと

連動して人類学博物館は現在閉鎖されており、改装再開は数年後に予定されている。ロンドンの人類学博物館、それにベルリンはダーレムのアフリカ美術館も、冷戦体制崩壊後、多かれ少なかれ同様の運命を辿ってきたことが想起される。

その横にある海軍博物館は、どうしたわけか日本のガイドブックには登場しないのだが、バリの小学校の学童たちは、かならず一度は参観で連れてこられる場所である。ナポレオン3世がセネスに來航した夜の大陸大歓迎の光景を描いたテオドール・ギュダンThéodore Gudin (1802-1880)の巨大な画面*図10と、その際に実際に使用された、現代のガレー船よろしき手漕ぎの巨大な船が、最初の部屋を占めている。それに続く湾曲した展示室群には、いずれも公式注文による巨大な帆船の海戦図が壁面を覆っている。ギュダンの他にも、例えばトラファルガーの海戦。ナポレオンのフランス海軍は、ここで英国海軍に敗北を喫するが、ルイ=フィリップ、クレパンLouis-Philippe Crépin (1772-1851)の作品《トラファルガーにおけ



図10 テオドール・ギュダン《セネに上陸するナポレオン3世, 1859年》1862-5年頃



図11 ルイ=フィリップ・クレバン 《トラファルガー海戦におけるルドゥターブル号》 1807



図12 ルイ=フィリップ・クレバン 《トラファルガー海戦におけるルドゥターブル号》(部分) 左のインヴィンシブル号艦橋のうえで倒れ掛かるのが、ネルソン提督。

るルドゥターブル号》(1807) *図11,12では、単独で英軍の陣列に殴り込んだ仏海軍のルドゥターブル号の活躍が特筆大書され、乗艦インヴィンシブル号の艦橋でいまもネルソン提督が銃弾を浴びて倒れる瞬間が、細筆で細密に描かれている。たまたま筆者が訪れた当日も、先生引率のフランスの学童がこの絵画の前に座らされて、「フランス史」を学んでいた。

さらにその奥の部屋には、ジョゼフ・ヴェルネー Joseph Vernet (1714-1789) がルイ16世の公式注文により、フランス大革命直前の晩年まで営々と描き続けた、フランス全国の港湾实景の巨大な壁画群が四壁を覆っている *図13~16。ビスケー湾に面したラ・ロッシュェルやロッシュュフォールは、いまでも当時の名残りをとどめているし、ボルドーも裕福な輸出港の繁栄ぶりをいまに伝える。北海に面したバイヨンヌの河口の海運のほか、ディエップは現在の町並みを髣髴とさせる詩情溢れる筆致で描き出されている。マルセイユ港では岸壁での荷揚げと商取引の様子が、さまざまな産物に分けて活写されている。とりわけ地中海の軍港トゥーロンは、大規模な造船所や兵站基地、武器貯蔵庫のありさまが詳細に描かれ、そこには着飾った貴婦人たちが見学に訪れ、

男前の青年士官たちに引率されている。大革命直前の旧体制下の貴族社会の一面をこれ以上生き生きと活写した風俗絵巻はほかにあるまい。写真のない時代で大壁画が果たした社会的役割を納得させるとともに、映像史料としても一級品だが、あまりに巨大なためか、日本に将来されることなど一度もなかった。このヴェルネーの連作ばかりは、ルーヴル美術館に行っても、一望に見ることは植わない。

この連作の港湾図には、ブルボン朝フランスの海運の栄光が集約されている。ちなみにこの画家一族の孫世代にあたるオラース・ヴェルネーは、七月王制下でルイ=フィリップのアルジェリア遠征に従軍し、反乱軍の英雄、アブドル・カーディルの移動陣地をフランス軍が急襲する場面を、高さ8メートル、横28メートルの大画面に描き出す。1846年のサロンに出品された作品は、詩人ボードレールが嘲弄したが、その後、ヴェルサイユ宮殿の戦争の間に納められた。岡倉天心は欧州視察のうちにこの大作を眼にしたようで、彼もまたその無意味な巨大さに軽蔑を隠さなかった。だがこうしてみれば分かるだろう、オラースは自分の祖父の偉業を、同時代の北アフリカの植民地化の事績に重ね合わせようとしていたことが。



図13 ジョセフ・ヴェルネー 《マルセイユ》フランスの港湾連作のうち（部分）



図14 ジョセフ・ヴェルネー 《ブレストの港》（部分）

図14 ジョセフ・ヴェルネー
《トゥーロン 兵器工廠側より》（部分）



図15 ジョセフ・ヴェルネー
《ボルドー》（画面右端より近接撮影）



海洋美術館と呼ぶべきか、海軍博物館と呼ぶべきかに、議論もあろうが、その展示品は、海への眼差しの変貌と、交通機関の発達を如実に納得させてくれる。一方で、アントワヌ＝レオン・モレル＝ファティオ Antoine-Léon Morel-Fatio (1810-1871) の《エトルタのパノラマ景》(1850) *図17をみれば、印象派のモネやそれに先行するクールベよりはやく、エトルタの岸壁が陽光に溢れた海景図の対象となっていたことが知られる。他方でレオン＝エミール、ラボルヌ Léon Émile Laborne (1837-1913) の《ボルドーの港》(1871) *図18は、外輪船ではなくスクリューの汽船が導入されはじめた時代の様相を描いて、ヴェルネーの時代との違いを印象づける。その奥には、1831年にルクソールのオベリスクをナイル川まで運んで船積みにした土木工事のジオラマ (1847) が保存されていて、工兵隊の作業の詳細を伝える。

ここまで触れなかったが、蒐集の中心は、帆船から鉄鋼船に至る艦船や商船の模型で



図17 アントワヌ＝レオン・モレル＝ラティオ 《エトルタのパノラマ景》 1850年

ある。模型職人は場合によっては王室直属の技師であり、模型そのものも歴史的な意義を担った。船舶史に興味のある向きにはお子様連れでの来館も楽しい体験となるだろう。筆者は少年の頃は世代のなせる技か、軍艦マニア、船舶愛好者だったので、本来こちらで書き記しておきたい備忘録も多々あるのだが、場所柄を弁えて、このあたりで切り上げよう。

(次号につづく)



図18 レオン＝エミール・ラボルヌ 《ボルドーの港》1871年

* 図10-18はいずれも、シャイヨー宮殿、海洋博物館所蔵。

* 掲載写真はいずれも筆者が現場でポケット・デジタル・カメラで撮影したものです。